

耕録自費

NO. 80 西畑亮一 2月の寺報の7~8ページに、我が意を得たり。内藤朝雄さんの『原子カムラ』と仲間うちの論理(前半)』が掲載されていた。

「仲間うちの世界」を保持するのに不可欠で好都合な「仲間うちの論理」は、仲間以外の人間の存在を…否定する。そんな仲間とは、役人であったり学校関係者であったりとされているが、これは主に、中央地方の政府を問わず、公務員じゃないだろうか。公共のため、国民あるいは地域住民のために働くはずの人たちが、実は自分たちと「仲間うちの世界」のために働いていたことになる。

なぜこうなるのか。このような状態が、なぜ続くのだろうか。それは、「組織の陰に隠れていれば何をやっても許される」という「仲間うちの論理」があるから。それに対し、「彼らから隠れ場所を奪うことが重要だ」と内藤さんは指摘する。このような責任からの逃走を許さないためには、指摘のとおり「仲間うち」という隠れ家をなくすこと。当たり前の話だけど、責任を取るべき1人ひとりに責任を取らせること、これに尽きる。小出裕章さんも、福島第1原子力発電所の事故に関し、なぜ個人責任を取らせないのかと言っていた。まったくだ！

ここで少し、「私と公(公共)」の関係を考えてみたい。公と共は厳密に言って違いますが、私人(公務員に対しての民間人)と公務員の働きを明確にするため、私と公(公共)という括りで考える。もし世界が、AとBという2人の村だったらと仮定しよう。AとBの生活領域の接点、及び共通部分を公(公共)とし、そこで発生する仕事を公務員のBが担当し、それ以外の仕事を非公務員のAが担当する。Bの仕事は、2人に共通しかつ必要な仕事なので、期待した結果が出るように注意深く扱われ、それと同時に、AからBは担当者として重要視された。公(公共)の仕事上失敗(Bの失敗)があると、村全体で損害を補償するとされて、AとBとで責任を分かち合った。他方で、Aが受け持つそれ以外の仕事というのは、型にはまらず自由ではあっても、範囲が広く定まらず、その分、さまざまな要因のために好調不調の波をものに受け、なかなか希望どおりに安定しない。Bは、AがBの食い扶持も含め日常生活に必要な財やサービスを生産しているので、表面上はAを主役とし自らを脇役としていた。しかし、Aの仕事で失敗があればAだけが責任を取った。最初は平等に、村世界で共に生きるAとBだったが、公(公共)の仕事が固定化し、たまたま担当したBの内心に芽生えた不思議な思惑が定着するにつれて、担った仕事に応じて身分という観念が生まれ、それには上下があつて、人格にまで差があるかのように見なされた。Aは村世界の苦悩を1人で背負う一方で、Bは身分を以てAには厳しく自分には甘くなった。私(非公)の仕事を担当するAと、公(公共)の仕事を担当するBとの間には、いつしか簡単には埋められない溝ができそれは次第に深まっていった。そしてついに、Bは村で自分だけの生き残りを平穩かつ公然と画策し始めたのだった。

この架空の話だと、Bが進める自分にだけ好都合な村のあり方が、「仲間うちの世界」だ。で、話を最初に戻そう。内藤さんは、そんな仲間の行為を、後半で説明のある「確率的殺害」と、まだ優しく表現しているけれども、私は、確信的殺人と言いたい。明らかにBは、AをBの解釈する自分にとって都合の良い世界のため、必要に応じ表面上はAを主役と持ち上げつつも実質的には生かさず殺さず有責な仕事に従事させている。Bは、現状の進行中にAが死んでも仕方ないと考えている。積極的ではないけれど、曖昧な気分ではなく確信的なのだ。大勢で1人なら合法的とか、何万人という人を殺せば英雄とか言うらしいが、私たちは、誤って1人殺しても当然に人を殺したんだから文字どおり殺人の罪に問われよう。ところが「仲間うちの世界」の人たちは、今や、車を止めるのにタイヤを狙わず発砲して人を殺しても無罪になるところにまで至ってしまった。

事ここに至っては…どうしようか。こうなったら、山田悦子さんが言っていた「ほにゃらら」しかあるまい。この「ほにゃらら」には、人によって入ることばが異なる。要は、私たちのやる気、いやこうなりゃ「ほにゃらら」やってまう気っ！だぜえ。